

近年の大災害に基づく日本人の災害観に関する研究 —市民の防災力向上に向けて その45—

正会員 ○ 大塚 実可*1
正会員 石川 孝重*2

防災 災害観 日本人
災害意識 阪神・淡路大震災 東日本大震災

§1 はじめに

2011年3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震は、観測史上最大規模を記録し、広域にわたり甚大な被害をもたらした。近年急速に変化している社会環境や今回の震災経験は、度重なる災害経験により形成され普遍的に受け継いできたとされる日本人の“災害観”に影響を与えたのではないだろうか。本研究では「災害観は変化する」という仮説のもと、災害に対して人々が抱く意識を分析し、日本人の新しい災害観を探ることを目的とする。また、近年発生した大災害の記録と比較することで災害観の変容を考察する。

§2 既存の災害観

廣井脩氏による日本人の災害観¹⁾によると、日本人は独特な災害観をもっており、主に天譴論・運命論・精神論の3タイプに分類される。これらの根底には自然を絶対視する自然観と仏教的無常感があるとされる。その災害観を文献²⁾等を参考に図式化すると図1のように描ける。

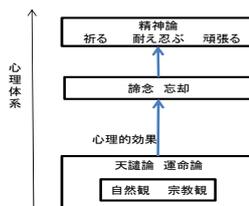


図1 日本人の災害観

§3 研究方法

災害観を分析するにあたり、本研究では前述の災害観を参考に4つの分析軸によって人々の意識や観念を5段階に評価し、数値化することとした。

個人の災害観が直接的に表現されている文献データを東日本大震災に関して新聞記事・書籍³⁾他から401件、ブログ・電子掲示板・twitter⁴⁾他から691件、近年の大災害である阪神・淡路大震災に関して書籍⁵⁾他から317件を収集し、分析対象として扱う。

分析軸は既存の災害観から抽出したキーワードとそれに対比する語からなり、自然の力と人間の力による対比から自然観を考察する自然一人為軸、直感的に感じる災害観と論理的思考から構築する災害観の直感一論理軸、精神的な表現と物質的な表現の割合を比較する心的一物的軸、災害に対する精神的な受け入れ状況を見る受容一否認軸の4つの対比語である。自然・直感・心的・受容を評価1とし、人為・論理・物的・否認を評価5として文献を評価する。各分析軸の評価詳細を表1に示す。また、評価1を「楽観的災害観」とし、評価5に位置する観念を「科学的災害観」とした。本来、人々の意識や観

念の分析は主観的になりやすいが表1のように評価に一定の基準を設けることで客観性を保つよう心がけた。

表1 各分析軸の5段階評価の詳細

評価	i. 自然一人為	評価	ii. 直感一論理
自然 ↑ 人為	1 自然=絶対的存在、人間の無力さを強調	直感 ↑ 論理	1 直感的な表現のみの言葉や文章
	2 明らかな自然優位、自然≠絶対		2 文章に脈絡がなく、結論が直感的な文章
	3 自然と人為の中間、葛藤		3 客観性はないが論理的に思考されている文章
	4 人為によって被害を減少可能		4 意味の補足することにより論理的になる文章
	5 人為によって自然をコントロール可能		5 論理的に組み立てられた文章
評価	iii. 心的一物的	評価	iv. 受容一否認
心的 ↑ 物的	1 感情的・精神的表現が全体の90~100%で構成	受容 ↑ 否認	1 現状を受容し、積極的に復旧・復興に向けて行動している
	2 感情的・精神的表現が全体の60~80%で構成		2 消極的ではあるが受容している
	3 感情的・精神的表現と物質的な表現が半数で構成		3 受容と否認の間で葛藤している
	4 物質的な表現が全体の60~80%で構成		4 状況は理解できるが、精神的には受け入れられない
	5 物質的な表現が全体の90~100%で構成		5 災害や現実を否定し、現状を認めることができない

§4 過去の大震災における災害観の分析

4.1 災害の違いによる分析

東日本大震災では、地震が津波、原発事故を誘発した。本来、原発事故は自然災害ではなく人為的事故と考えられるが、社会に与えた影響の大きさを考慮し、地震・津波・原発・災害全体の4つの項目で比較分析を行った。その結果、原発と他3つの項目で大きな違いがみられた。それが顕著なのは図2に示す自然一人為軸である。

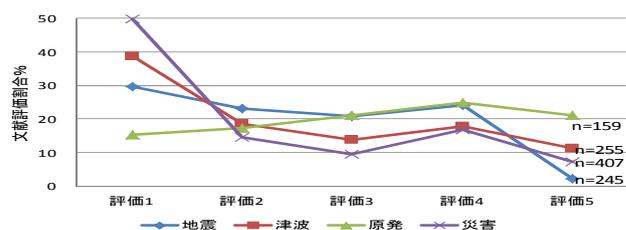


図2 災害の違い 自然一人為軸

地震・津波・原発・震災全体では評価1、2の割合が大きく自然優位の傾向であるが、原発は評価4、5の割合が大きく人為優位であることから他の災害と比較すると明らかに異なる。また、他の3つの軸でもこの傾向は同様にみられ、原因が自然災害の事故であっても、災害と事故では人々の意識が異なることがわかる。

4.2 被災者と一般の違いによる分析

文献データから発信者自身が被災したことが読み取れ

るものを被災者、その他を一般として被災の有無による分析を行う。受容—否認軸における被災の有無の違いを図3で示すと被災者の方が評価1の割合が大きいことがわかる。これは他の分析軸でも同様で、一般と比較すると被災者の方が評価1、2の割合が大きい傾向にある。つまり、自然の脅威を実体験した被災者の方が直感的に諦念を抱き、災害を受け入れる傾向が強いと考えられる。

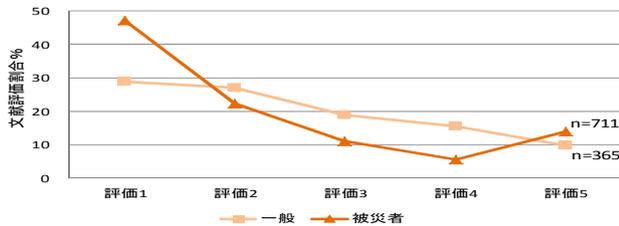


図3 被災の有無 受容—否認軸

4.3 時間的推移による分析

災害観の時間的推移を考察するため、1995年に発生した阪神・淡路大震災(図4)をとりあげ、東日本大震災発生直後(2011年3月11日~4月30日)を第1期(図5)、震災発生後半年(2011年9月1日~10月31日)を第2期(図6)として比較する。

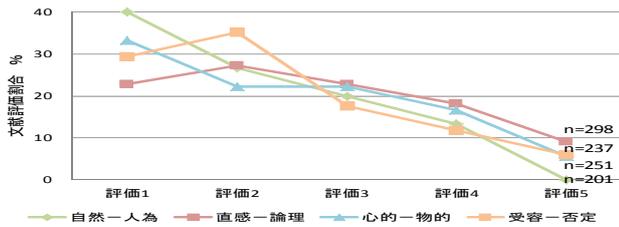


図4 阪神・淡路大震災における評価

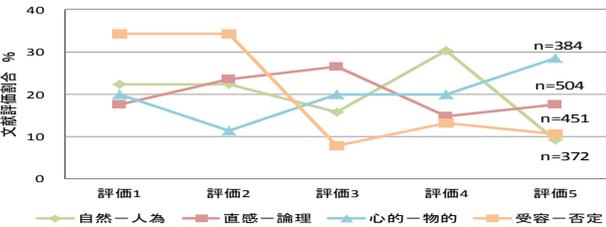


図5 東日本大震災 第1期における評価

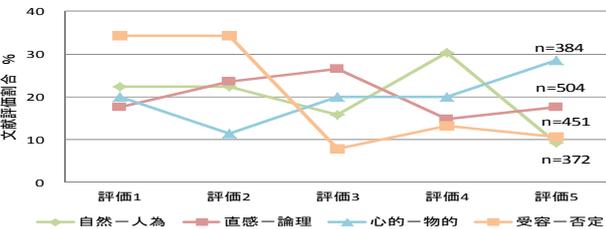


図6 東日本大震災 第2期における評価

図4では分析軸に関わらず総合的に評価1、2の割合が大きいことから自然絶対視からなる災害へのあきらめが強いといえる。東日本大震災直後の第1期では分析軸によって評価がばらつき、時間の経過とともに、評価の割合が変化していることから、東日本大震災によって災

害に関する意識に変動があったとも考えられる。

§5 災害観の比較

文献データの分析により人々が抱く災害に対する意識を図式化すると、阪神・淡路大震災、東日本大震災の災害観を図7・8のように描ける。阪神・淡路大震災では既存の災害観と同様に、災害は防げないのであきらめ、受け入れようとする傾向に加えて、災害を受け止めることへのとまどいや葛藤がみられる。また、横軸を本研究で表した評価軸で示すと、災害は単なる自然現象という観念から、あきらめない、忘れない、対策・教育へと発展する科学的な要素もあわせもつ。また、東日本大震災では、科学的災害観と楽観的災害観のなかでとまどい、葛藤することで、心理過程が複雑化している。つまり、災害観は社会環境の変化や多くの災害経験から少しずつ変容している。また、現代の災害観は、既存の災害観である日本人独自の災害観と、一般市民にも浸透してきた科学的災害観が両立した上で、相互に作用しながら形成されていることが分かる。

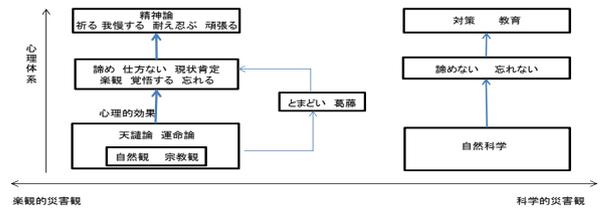


図7 阪神・淡路大震災における災害観

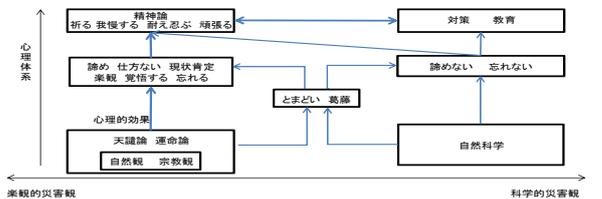


図8 東日本大震災における災害観

§6 おわりに

本来、災害観とは長期間を経て形成されていくものであり、十数年の短い期間での変容や新しい災害観を特定することは難しい。本研究では、主観的な個人の意識を定量化し、客観的な分析に資することで、新たな災害観の一端を明らかにした。

【引用文献】

- 1) 廣井脩：新版 災害と日本人 巨大地震の社会心理，時事通信社，1995年4月1日。
- 2) 伊村則子：震災体験の継承，第4回地震防災シンポジウム「阪神・淡路大震災が問いかける都市防災システムの課題」資料，日本建築学会，pp.67~70，1997年11月20日。
- 3) 新出安政：東日本大震災99人の声 あの日わたし，星雲社，2011年10月11日。
- 4) Akikoy：https://twitter.com/#!/akikoy/status/60520055598，2011年04月19日。
- 5) 西井一夫：毎日ムック[完全保存版]詳細 阪神大震災 1995年1/1からの復活，毎日新聞社，1996年1月17日。

*1 日本女子大学大学院 大学院生
*2 日本女子大学住居学科 教授・工学博士

*1 Graduate Student, Division of Housing, Japan Women's University
*2 Prof., Dept. of Housing and Architecture, Japan Women's Univ., Dr. Eng.